

支部だより

2016.2.19 No.8 東京支部事務局

総会後の

講演会の概略 報告

演題 = 『プリントによる最終表現』

講師 = 堀内カラー 主幹 石橋 泰弘 氏

◇お聞きいただいでご参考になる話ができるかどうかわかりませんが、皆さんからお預かりした作品を如何にして素晴らしい作品として仕上げるか、もちろんご自身が満足するための作品作りではありますが、第三者が見ても納得できるように、私どもの普段からの経験値を生かして、皆さんとコラボレーションするという事です。

皆さんのセンスの中に私どもの感性を重ねていくことになります。今日は「こんなことをしていくといい作品になるのでは」のアドバイスをさせて頂きたいと思います。

◇まず最初に、写真を撮ることに関しましては、私や弊社の社員より皆さんの方が素晴らしい写真をお撮りになると思いますが、作品をフィニッシュするに当たりましては、私どもも情報を収集しておりますので、その情報を提供させて頂く仕事をしております。作品は作品展として発表するだけでなく、ポートフォリオにして普段も自分の手元に置いて、発表の機会が来た時すぐに出せるようにしておくのが効率のよいやり方だと思います。

皆さん方は撮影するには一生懸命、時間を惜しんで取り組んでおられると思いますが、作品の最終はデータで見るわけはありません。

◇私が常に思うのはフィルムカメラで撮って印画紙に焼き付けた時、被写界深度などシャープなところはもちろん大切ですが『曖昧なところ』も写真の良さではないかと思えます。ここ数年、シャープさも際立って良くなりました。それを上手く利用して『曖昧さ』と『シャープさ』を表現に生かしてみてもどうでしょうか。高いお金を出して買った一眼レフ、かたや片手に持って撮れる 아이폰でも比べてみると、データの的にはそれほど変わりません。一眼レフに関しましてはデータの取り込み方が昔では考えられないほどで、あまり手を加えずに絵作りが出来る。その絵作りにアートが加わる。

あるものをあるがままに撮る。当然のことではありますが、アートの切り取ってみるといいうやり方もあります。皆さん方も私たちが敬服するほど、忍耐強くいい作品を撮ろうと構図を決めたりされていることと思えますが、『偶然の一瞬』のチャンスを作品にすることもあることと思えます。偶然を逃さないのも才能の一つだと思います。この『偶然』は 아이폰などで街中で撮ったものを切り刻んでくっつけるアート表現とは違う様に思えます。むやみにシャッターを切っても、構図に合ったいい作品は残せないのではないのでしょうか。

◇話は少し変わりますが、アメリカの映画社会ではネガフィルムが見直されています。多くの女性作家がネガフィルムを使っているとの話も聞きます。生まれた時からデジタル時代で育った人たちは、フィルムにはデジタルにない新鮮さを感じ、デジタルにはない不思議な場面に遭遇するようです。チャンスがありましたらリバーサルフィルムの代わりに、ネガフィルムを装填して撮って現像してみたいと思います。ネガは再現域が広く、露出の増減に堪え易い。同じ被写体を撮り比べると「こんな味の違いがあるんだ」と初めて気づくことがあります。「こうあるべき」と言うのではなく、いろんな入口があることに気づかれることと思えます。

◇現像はともシステマチックにできています。いつでも同じ様にできる。これがプロラボと言われるところです。しかし、実際は同じ原版を数社に現像依頼をすれば出来上がってくるプリントの味は絶対に違ってきます。例えば、10人が関われば出来上がったものを並べてみると、10人とも違って来る。大きく違うというのではなく微妙な違いが生じます。データはゆるぎないものですが人間の手を通す限り、扱った人の感性が落としこまれますので当然のことかと思えます。

◇ではこの感性の違いをどの様に作品づくりのフィニッシュに生かしていくか。私どもは作品を作るためのお手伝いです。受け付ける者に、2L程度のターゲットプリントをもとに、想いや出来上がりのイメージを伝えて欲しいと思います。お互いの感性が感じ取れるようにする上で『受付』でのコミュニケーションを図ることが大切かと思えます。

講演終盤で質問も受けて下さいました。戸張氏、鈴木(映)氏 佐々木氏の質問がありました。また、現像液の管理システムの講演内容につきましては紙面の都合で省略させて頂きました。

(文責=事務局)